

西区地域子育て支援拠点事業 5か年のまとめ 実施概要

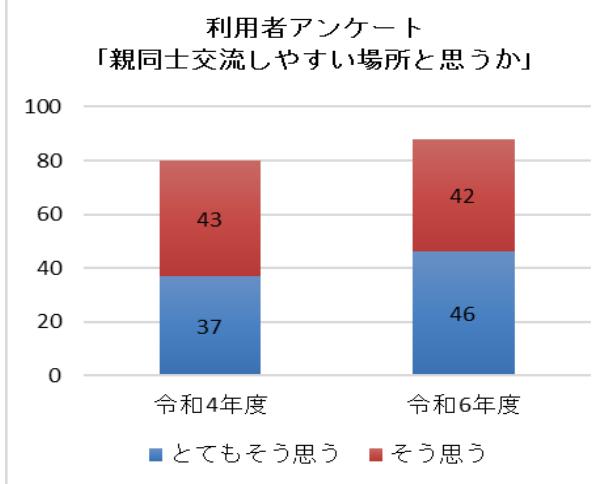
対象事業	西区地域子育て支援拠点事業
対象期間	令和3年度～7年度(5か年)
事業の実施者	特定非営利活動法人シャーロックホームズ 西区こども家庭支援課
実施目的	1 今期5か年の事業を振り返り、成果や課題、今後の方向性などを整理します。 2 市民協働事業の実践を通じて経験を蓄積し、その後の市民協働や市民協働事業に活かしていくため、また、当該協働事業の当事者だけでなく、多くの市民等の協働への参加意欲を高めるため、当該評価を公開し、透明性を高めます。
実施時期	令和7年8月
実施について	<p>拠点事業は、区と運営法人との協働により進めています。 毎年度、事業ごとに定めている「目指す拠点の姿」に沿って役割分担し、行動計画を立て、年度末には「振り返りの視点」に沿って取組の振り返りを行なながら事業を進めてきました。また、中間期には「有識者を交えた事業評価」を実施し、事業の運営・管理にフィードバックして拠点運営状況の向上を図っています。 今回は、中間期に行った「有識者を交えた事業評価」にその後の事業振り返りを加え、今期5か年のまとめとしました。</p> <p>【参考】拠点の7事業</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供(親子の居場所事業) 2 子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること(子育て相談事業) 3 子育てに関する情報の収集及び提供に関すること(情報収集・提供事業) 4 子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること(ネットワーク事業) 5 子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること(人材育成、活動支援事業) 6 地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること (横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業) 7 子育て家庭のニーズに応じた施設・事業等の利用の支援に関すること(利用者支援事業)

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	○プレママの利用が増えないため、区と協力して周知に取り組む必要がある。 ○双子の利用者が増えないため、転入者を把握したうえで対応を行う必要がある。 ○土曜日の利用者が増えて混み合っているため、一人一人のニーズに応えていく工夫が必要である。 ○入場制限により利用できない親子が出てしまうことがある。(年10回程度) ○復職する人が増え、親子の育ちを限られた時間の中で支援できるように、居場所や事業において仕組みを作っていく。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		B	B

評価の理由(法人)

	令和3年度	令和6年度
年間利用者数	16,061人	17,605人
新規登録者	983人	1,011人
父親利用数	896人	1,146人

プレパパママ 参加人数	令和3年度		令和6年度	
	プレママ	プレパパ	プレママ	プレパパ
ミライデー	15	13	14	14
区委託プレパパママクラス	-	-	47	43
合計	28		118	



①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場

- 最初の2年間はコロナ禍で、人数制限や飲食禁止などの制約があったが、スタッフで工夫し、安全な環境と、常に笑顔で親子を迎え、入口や窓に季節感をとりいれた装飾を施し、ほっとでき安心できる場所づくりに努めた。
- 令和6年4月から利用時間の制約をなくし、昼食時間の利用も定着してきた。利用者アンケートの結果からも「危険が少なく安全にあそばせられる」「スタッフと話がしやすい」という点が評価を得られた。
- 課題となっていた「親同士の交流が図れる場になっているか」についても利用者アンケートの結果改善されている。

②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場

- ひろばでのイベント「スマイルミライデー」では区役所のプレパパママクラスに行けなかった利用者の参加につながった。令和4年度以降、区役所からの委託プレパパママクラスをスマイル・ポートにて開催し、プレ期の親に拠点の周知をすることができた。
- こんにちは赤ちゃん訪問や区役所と連携し、多胎児向けのチラシを配布して周知し多胎児の利用が定着している。
- 父親支援として「パパ講座」を年3回開催。その参加者から派生した「パパスマイル」というLINEグループで地域の父親同士の交流の輪が広がった。
- 日曜開館日に「パパのしゃべり場」をつくり、当事者パパが企画運営した。
- 外国につながる親子向けの「やさしい日本語でおしゃべり」「YOKE共催イベント」などにより普段利用しない方の参加につながった。また、毎週英語が話せるスタッフがいる日を設定すること等によって外国につながる人の利用が増えている。
- 発達に心配のある養育者のための「ゆるっとトーク」を定期的に開催した。気持ちをうちあけられず1人で悩む保護者が多い中、実際に経験した保護者の話をきくことにより不安が解消されている。
- 「おしゃべりの会(サポートが必要な親子向け)」と「ダブルケアカフェ」ではお互い同じ境遇の保護者同士がなかなか出会う機会がない中情報共有ができた。
- ワーキングマザーに対しての「復職カフェ」では先輩ママの話を聞くことにより、復職したときの予想ができ復職に向けての準備をすることができた。
- SNSでひろばの様子を発信するようになってからそれを見て来館する新規登録者が増えた。
- スマイルデビューデイでは、プレパパママや月齢の小さい親子の参加が増えている。
- 多様な養育者を受け入れられるように、スタッフも幅広い年齢層を配置している。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

③養育者と子どものニーズ把握の場

- ・利用者アンケートを毎年実施し、ニーズを把握し公表している。
- ・全てのイベントや講座で終了後のアンケートを実施した。利用者からのご意見箱(スマイル・ポスト)を作成し、オンラインでも対応できるようにした。
- ・日々訪れている親子から直接的にニーズを引き出せるよう、スタッフ会議や研修にてスタッフのコミュニケーション能力のスキルアップを図る機会をもっている。

④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場

- ・利用者と共に「プラレールイベント」や「蚕お譲り会」などのイベントを企画実施し、子の成長を実感できる場を創出した。それを低月齢の親にもみてもらうことで先の見通しをもってもらうなどの効果もあった。
- ・「復職力フェ」では復職した当事者ママたちが自分の経験を話しこれから復職する養育者の課題解決に役立った。
- ・「スマイル・つながるプロジェクト」では近い地域・月齢同士で交流ができ、終了後も一緒に地域のイベントに参加しているなど、交流が継続している。
- ・「集まれ!さぽーたーさん&さぽーたん」の企画を毎月実施しひろばで作業をしながらゆるく交流できるしきけを作った。
- ・0歳児向けの「親子ふれあいあそび」、0~1歳向けの「保育士さんとあそぼう」幼稚園入園を控えた親子向けイベント「春から幼稚園へいく親子集まれ!」「スマイルGO」を行い、各月齢に応じて子どもと触れ合うコツをつかめるように工夫した。
- ・地域の中学校でのふれあい体験に参加を促し、異世代との交流を体験してもらう仕掛けづくりをした。
- ・スマイルフェスでは、養育者の中から出演者を募り、サービスの受け手ではなく、自分たち自身でイベントをつくりあげる実感がもてる機会を提供した。

評価の理由(区)

- ①定例会や事業開催時等に拠点及び会場に出向き、ひろばの環境が安心して過ごせるような配慮がされているか確認している。
- ②妊娠期の支援として、拠点でもプレパパママクラスを実施することで、妊娠期からの拠点利用につながっている。また、外国につながる方へのアプローチとして、養育者に対して母子健康手帳交付や乳幼児健診、転入手続きなどの時期を捉えて、外国語版スマイル・ポートのチラシの配布や、外国につながる親子向けのイベントのチラシを配布し、周知を行っている。
- ③ひろば利用者やイベント参加者へのアンケート等でニーズを把握している。また、区役所で把握した地域特性や課題を拠点と共有しながら、事業の内容に反映するなど、支援につなげている。さらに、区役所開催の事業の中で把握した保護者のニーズを適切に共有している。
- ④母子健康手帳の交付時や母子訪問、乳幼児健康診査などで、拠点のひろば機能を積極的に周知するとともに、養育者の個別性に合わせて、ひろばの利用につなげた。また、拠点が実施する事業の開催方法や講師の選定方法等について、ともに検討し助言を行うとともに、定例会で前月の講座等の報告を受け、実施結果について把握がでている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・コロナ禍での法人交代であったが、困難な状況下で育児をしなければいけない養育者に寄り添い、あたたかく迎え入れる場としての機能を果たせ、コロナ終息後は、利用者のニーズに合わせて様々なイベントを実施できている。
- ・中間振り返り時の課題だった「親同士の交流」についても、交流の機会を増やす工夫をし、その結果利用者アンケートの数字も改善した。
- ・多様な世代、性別等の養育者と子どもを受け入れる仕掛けを工夫し、利用につながっている。
- ・ニーズのある日曜開館日を設けるなど、家族のあり方が変化している時代への対応を図った。

(課題)

- ・拠点の利用者数がコロナ前の水準より低い。親の状況の変化はあるものの現状の利用者の利用率をあげるなど、工夫の余地があると考える。
- ・復職までの期間が短い今の親子に「親として育つ場」「子として育つ場」をどう提供するかをさらに考えていく必要がある。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	○相談件数や内容について、区の特性による課題の抽出ができていない状況である。 ○利用人数の少ない個別相談事業については、これまで開催日時等を見直していないため、検討が必要。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

●相談件数

●年齢別ひろば相談内容(1位の内容)

	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
ひろば相談	1129件	1037件	865件	1251件
個別相談	285件	267件	218件	230件

	R4年度	R5年度	R6年度
0歳	子どもの発育	子どもの発育	子どもの生活
1歳	子どもの発育	子どもの発育	子どもの生活
2歳	子どもの発育	就園・就学	就園・就学
3歳	就園・就学	就園・就学	子どもの生活
4歳以上	就園・就学	子どもの生活	子どもの発育

1. 安心して、気軽に相談できる場

- ・ひろばでの何気ない会話や子どもとのやりとり・声掛けの中から信頼関係ができ、気軽に相談できる雰囲気を心がけた。また相手に寄り添いながら傾聴する相談を心がけることで、養育者が安心して相談できる場になっている。
- ・ひろば内での相談の他、電話相談、オンライン相談、個別相談、グループ相談など様々な形で相談が受けられるよう体制を作った。
- ・心配な相談に対しては、拠点内の専門相談（臨床心理士相談・助産師相談・保育コンシェルジュ相談）を紹介つなげた。令和7年度からは定期的に栄養士相談も開始した。
- ・スタッフがひろばで受けた相談を、必要に応じて子育てパートナーや子育てサポートシステムにつなげて、多面的なニーズに応えられるようにした。
- ・西区実践交流研修・初任者研修・18区施設長会主催の研修などで、地域資源やスタッフの傾聴方法、実際の親子の悩みなどを学び、スキルアップを図っている。
- ・毎日の反省会では、成長発達のこと、保育園幼稚園のこと、親自身のこと等、相談内容を共有し、振り返りを行うことで、次の相談に生かした。

2. 関係機関との連携と継続的なフォローワー体制

- ・区と連携し、各専門機関の役割も把握し、養育者を関係機関につなげる体制を作った。
- ・専門的対応が必要と考えられる相談は、区と相談しながら対応した。
- ・関係機関と継続的に関わるケースについては、区と随時報告し合い情報を共有することができた。
- ・専門機関につなげた後も、必要に応じて継続的に支援を行った。

評価の理由(区)

- ①母子健康手帳の交付時や母子訪問、乳幼児健康診査などで、拠点で子育て相談ができることを積極的に周知している。また、拠点での相談内容について定例会で拠点と適宜共有するとともに、必要に応じて対応方法等についてともに検討し、助言をしている。その他、相談スペースが安心して相談できる環境になっているか確認している。
- ②専門的な対応が必要な世帯について、拠点から他の相談機関へのつなぎ方や相談先をともに検討し、助言している。また、拠点が対応した世帯が区や関係機関とつながった後も、拠点と役割分担の確認や情報共有を行っている。

拠点事業としての成果と課題	
(成果)	<ul style="list-style-type: none"> ・相談方法について、電話・オンライン・個別・グループなど、様々な形で行うなど、相談者のニーズや相談内容に合わせて対応をすることができた。 ・関係機関と継続的に関わる世帯については、互いに情報共有を行うなど、丁寧に事後フォローをすることができた。 ・相談内容をスタッフ間で共有することで、対応したスタッフが不在の場合でも対応ができる体制を整えた。また、事例を共有することで、スタッフの知識を深めることもできた。
(課題)	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、研修や日々の相談業務を通して、スタッフのスキルアップを図っていく。（拠点で働いている子育て支援者にも適宜相談していく） ・相談業務の中で出てきた悩みや困りごとを解決できるよう、拠点でのイベントや講座にどう活かすかを引き続き検討していく。 ・区役所で気軽に相談できる場所がなくなってしまい、利用者より困っているという意見が複数あるため、定期的に拠点スタッフが出張し、相談できる場所が欲しい。

振り返りの視点

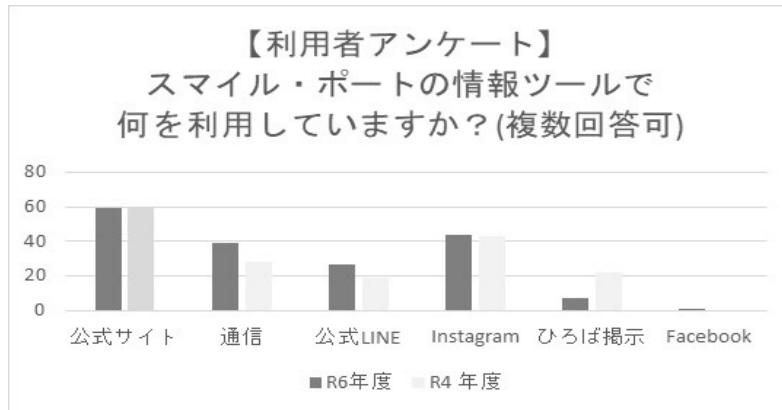
- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	○区内外から寄せられる情報が多岐にわたるため、提供する情報の取捨選択の必要が生じている。 ○区(市)外からの転入者に対して、拠点の機能について、情報提供の機会や方法等を検討する必要がある。	A	B
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		A	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		B	B

評価の理由(法人)

【表1】情報ツール一覧	対象	
スマイル・ポート通信通常版	養育者・担い手	年12回発行/2500部/館内で利用者に配布の他、区内約170か所に配布/データで送付
スマイル・ポート通信特別号	養育者・担い手・区民・ネットワーク	年2回発行/5500部/毎月の通常版と共に新規利用者や、赤ちゃん訪問、区の赤ちゃん教室、地域のまつりなどで配布
おでかけマップ(西区子育て航海図)	養育者・担い手	年1回発行/5000部/館内で利用者に配布の他、区内約130か所に配布
公式サイト R7(2025)年2月リニューアル	養育者・担い手・区民	拠点や地域のカレンダー、基本情報の周知、やさしい日本語や英語など多様な言語に配慮した周知
Instagram	養育者・担い手・市民・社会全体	拠点や地域の情報を随時画像付で配信。法人交代時フォロワー数270
LINE公式 R4(2022)年1月~	養育者・担い手	拠点のイベントや地域の最新情報を毎週土曜日に配信。R6(2024)/04カード型へ。利用のお知らせ等
Facebook R4(2022)年10月~	ネットワーク	拠点や地域の情報を随時画像付で配信。
LINE連絡用	担い手・参画した利用者との連絡	支援者連絡用、および利用者とのLINEグループでの連携



【表2】各主要ツール利用数等 年度推移	R3年度末(2021)	R4年度末(2022)	R5年度末(2023)	R6年度末(2024)
公式サイトページビュー数	73,543	113,503	132,280	143,499
公式サイト訪問者数	14,870	23,453	29,168	27,948
Instagramフォロワー数	763	1,219	1,618	1,910
公式LINE登録者	161	497	877	1,164

【表3】公式サイトリニューアル後ページビュー数前年度比較							
R6(2024).2	R6(2024).3	R6(2024).4	R6(2024).5	R6(2024).6	R6(2024).7	R6(2024).8	平均値
11,186	11,064	10,637	10,548	11,812	11,659	10,787	11,099
R7(2025).2	R7(2025).3	R7(2025).4	R7(2025).5	R7(2025).6	R7(2025).7	R7(2025).8	
17,191	13,370	14,979	14,194	15,499	14,484	16,528	15,178
※公式サイトリニューアル 2025年2月3日							

1 子育て支援情報の収集・提供

- ・養育者にとって必要な情報を公式サイトやSNS,LINE配信など様々なツールを使って発信した。拠点を利用していない人、通信を手に取ることができない養育者にも子育て支援の情報を発信することができた。
- ・情報収集にあたっては、子育て支援団体との連絡手段にLINEも加えてレスポンスを早くするとともに、スタッフが子育て支援団体へ巡回訪問することでより生の声を収集することも心掛けている。特に養育者の関心の高い、保育園、幼稚園情報についても定期的に情報を聞きとり更新して、館内で見やすく掲示している。
- ・また、法人が運営している他部門の情報発信事業との連携で（横浜子育て情報スポットにて拠点のダブルケイメントの紹介記事を掲載/ベイ★キッズマガジンの子育てに関する記事を拠点で掲示、配布等）、より幅広い情報収集や発信が可能となった。
- ・拠点で行う講座系のイベントではオンラインにも対応するなど、色々な方法で子育てに関する情報が入手できるよう工夫をした。
- ・公式サイト解析のデータ（スマホユーザーが9割である）と、養育者からの声をうけ公式サイトをスマホでも使いやすく、ひろばの雰囲気が伝わるようにリニューアルした。
- ・公式サイトリニューアル2月から8月までと前年度同月間を比較するとページビューが平均4,000以上になり効果が出ている（表3参照）

2 区民への周知

- ・幅広い年代が集う場所（各地域の掲示板、にじとも広場、西スポーツセンター、商業施設の掲示板、旧西区役所キッズスペース横壁等）にも通信等を配架・掲示するなどして多世代の目に留まるよう努めた。
- ・区と協力して、広報よこはま西区版にスマイル・ポートの情報収集発信機能の紹介をした。
- ・スマイル・ポートの紹介動画を制作し、乳幼児健診時に放映する等、周知する際に活用している。
- ・地域のおまつりなどに参加し、通信を配布、区民まつりではそれに加え、地域のサロンなどのパネルを展示するなど広く区民に周知できるよう努めた。
- ・公式サイト等を通じた情報発信により、他団体からの問い合わせやボランティア希望者が増加。地域の方や利用者からも「地域の情報がまとまっていて助かる」などの声が多く、イベントでは「サイトやInstagramを見て来た」という参加者も増えた。

3 養育者や担い手の関わり、他機関との協力

- ・幼稚園、保育園情報について、養育者からのコメントをもらってファイルにまとめて掲示し、誰もが手に取りやすいように工夫している。
- ・その他、「パパママが子連れで行きやすい施設」「おしえて！保育園・幼稚園」「おすすめの公園」などテーマを決めて館内でコメントを記入してもらい、来館者にみてもらうコーナーを作った。
- ・また通信やLINE配信、Instagramなどの発信の際に、拠点内イベントや、地域の居場所への参加の感想など、養育者からの声を掲載するなどし、同じ養育者目線でおすすめできるように努めた。

評価の理由(区)

- ①おでかけマップ（西区子育て航海図）をともに作成し、子育て情報を集約しているほか、保育・教育コンシェルジュが拠点に出向き、保育情報等の情報提供を行っている。また、拠点が毎月発行している「スマイル・ポート通信」や公式サイト等の広報物について、内容確認を行うとともに、より情報が読者に伝わりやすくなるよう助言を行っている。
- ②広報よこはま西区版でもスマイル・ポートや横浜子育てサポートシステムなどの周知を行っているほか、母子訪問や赤ちゃん教室、乳幼児健康診査等の養育者と関わる場面においても、子育て情報が集約されているスマイル・ポートの公式サイトやSNSの紹介を行っている。さらに、乳幼児健康診査時にスマイル・ポートの紹介動画を放映し、拠点に相談機能があることを周知している。その他、毎年子育て施設パネル展（幼稚園・保育園等）を区民ホールで開催し、情報発信の場を提供している。
- ③子育て支援者やこんにちは赤ちゃん訪問員が拠点を紹介できるよう、拠点事業の共有を行っている。また、担い手から届けられる情報について、適宜確認をし、必要に応じて情報の公平性等について助言を行っている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・「スマイル・ポート通信」や「おでかけマップ(西区子育て航海図)」など、紙媒体での情報発信を行ったほか、公式サイトやSNS(LINE、Instagram)など、様々なツールでも情報発信をすることで、よりひろく多世代に情報を発信することができた。また、「スマイル・ポート通信」やスマイル・ポートの公式サイトについては、リニューアルすることでより見やすくなり、画像などを置くなど視覚的に受け手に伝わりやすくなった。
- ・子育てサロンなどの地域のひろばに関する情報は現在は公式サイト上で発信できるよう情報が集約する仕組みになっている。「スマイルつながるプロジェクト」では参加者から訪問先の感想などを受取り、情報発信の際に組み込んでいる。拠点内の掲示板も養育者の声を集約し情報発信として活用している。
- ・地域の担い手の情報発信について、必要に応じてLINEなどのSNS機能の活用ができるようサポートできた。
- ・ひろば掲示や公式サイトの地域情報の更新のため地域の団体からの情報が拠点に定期的に集まる仕組みができている。

(課題)

- ・新たな課題として、子育て応援アプリ「パマトコ」で発信する地域情報について、地域限定の情報などさまざまあるため、どのような情報を発信していくか子育てサロンなどの地域のひろばの担い手の意向をくみ、拠点と区が相談していく必要がある。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	○地域特性や地域課題を区と拠点で共有する機会がなかった。地域の特性に応じた支援方法を検討していく 必要がある。	A	B
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつなげている。	○今後は、地域活動における次世代の担い手育成が必要。	A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

	R3年度	R6年度
地域の親子の居場所延訪問回数	21回	96回
西区子育てひろば連絡会開催 (R5年度より常設ひろば全6施設に拡大)	1回	2回
出前合同育児講座共催 (R3年度はコロナ禍で小規模多回数実施)	13回	10回
子育て支援活動者向け研修会・交流会開催	0回	2回
スマイル・つながるプロジェクト 地域へおでかけ年間訪問箇所数	5か所	21か所
スマイル・つながるプロジェクト 年間延参加者数	86人	265人

項目	内容
第六地区子育て連絡会参加	毎月の連絡会に出席。毎年防災イベントを実施。
子育て関連施設連絡会(センター園として)参加	各施設のPRパネルを集め、区役所とスマイル・ポートで掲示 R6年には勉強会をスマイル・ポートにて開催
出前合同育児講座(センター園として)参加	拠点利用者を地域の子育て支援施設や居場所につないだ。
センター会議参加	区内相談窓口のある専門機関のネットワーク。利用者を互いに繋ぐ
サポートが必要な親子の会	○△□の会を受け継ぎ、多機関と連携して開催。
近隣の神奈川大学やMM地区とのネットワーク	地域の祭りに学生と出店し、地域住民への拠点事業の周知を図った。
地域ケアプラザとの連携	ダブルケアイベントや、サポートが必要な親子向けの講座を実施。
にしても広場(区民活動支援センター)との連携	みちあそび事業共催、地域づくり大学への参加
横浜市国際交流協会との連携	外国につながる親子向けイベントの開催

1 地域の子育て支援活性化のためのネットワークの構築

- 初年度はコロナ禍で支援の制限もあり地域子育て支援団体とのネットワークの構築が遅れたが、2年目以降は積極的にアウトリーチし、ネットワークの輪を広げた。地域の子育て支援の活動者との連携を深めるために、直接訪問をしたほか、公式LINEとは別にLINEアカウントを取得して連絡ツールとして活用し、連携を深めた。
- 子育て関連施設連絡会：西区は、子育て支援のためのネットワークが以前より存在し、地域団体と連携して出前合同育児講座を継続的に実施している。その中心メンバーとして精力的に活動をした。
- 区社協やケアプラザとのネットワークについては、ダブルケアやサポートが必要な親子の会、などの事業を協働して実施していく中で関係性を深め、最終年には4ケアプラザ合同企画や、ケアマネージャーとの共同企画研修も実現できた。
- 主任児童委員とのつながりをつくり、中学校のふれあい体験での協力体制を作った。
- 子育てひろば連絡会を令和3年度に再開し、つどいの広場と区、拠点での情報交換をする場を設けた。令和5年以降は常設のひろばである、ろぜっと保育園、南浅間保育園、ガツツびーと西のおもちゃ文庫にメンバーを拡大し、区内の子育て支援ひろばの連携を図った。
- 法人がもつ縁から、神奈川大学経営学部と連携し、みなとみらい地区の地域のまつりに協働して出店しスマイル・ポートの周知を図った。実行委員会のメンバーになりMM地区の住民や関係団体とのネットワークもできた。
- 各地区の民児協や地区連会に出席し、拠点と子育てサポートシステムの周知に努めた。

2 ネットワークを活かした拠点利用者の地域へのつながり

- 初めて拠点を訪れた養育者に向けて、地域の子育て支援情報を丁寧に伝え、身近な支援の場につなげている。
- 年4回実施する連続講座「スマイル・つながるプロジェクト」にて、参加者とともに地域の子育て支援の場を訪問することで養育者たちが地域につながるきっかけを作っている。
- にしても・浅間台みはらしプレイパークとの連携で近隣の小学校の協力も得て外イベント「みちあそび」を毎年実施している。
- 中央図書館と共に「図書館へ行ってみよう」イベントを実施している。
- 区内のプレイパーク開催日に子育てパートナーが出張することで、拠点を知らない地域の養育者へ通信を配布して周知したり、逆に興味があってもまだプレイパークに行ったことのない拠点利用者をつないでいる。（年2回実施）

評価の理由(区)

- ①西区子育て関連施設連絡会として、拠点や保育所・幼稚園等と連携して、地域に出向いて育児講座を実施するなど、地区ごとのつながりを強めている。また、「子育てひろば連絡会」として、拠点、親と子のつどいの広場、育児支援センター園、子育てひろば実施園、区で意見交換をすることで、各施設の状況を共有し、各施設・事業の運営に生かしている。さらに、子育て支援者定例会を活用し、パートナー、支援者及び区職員がつながることができる体制ができている。
- ②拠点の事業等について、乳幼児健康診査等にて周知や場の提供ができている。

拠点事業としての成果と課題	
(成果) <ul style="list-style-type: none">・子育て支援団体のみならず、区内の様々な団体の活動の場に足を運んで顔の見える関係をつくるなど、つながりを広げることができた。・育児支援センター園として、「出前合同育児講座」や「子育て関連施設PRパネル展」など、「子育て関連施設連絡会」における取組において、中核的な役割を担った。・区内の様々な専門機関と連携し、ともに事業を実施することができた。・法人のダブルケア事業の関係で、韓国の子育て支援機関とのネットワークもできた。	
(課題) <ul style="list-style-type: none">・こども家庭センターがスタートするにあたり、区役所とともにどう地域のネットワークをつくっていくかが今後の課題と考える。	

振り返りの視点

ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。

エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

オ 子育て支援活動に関心のある方を丁寧に受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)			
		法人	区		
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	○サークルリーダー研修等を通じて、地域の自主的な活動に結び付けていく必要がある。	A	B		
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。	○地域で子育てをしていた方をボランティアとしてあまり受け入れられていないため、そのような方々を積極的にボランティアとして受け入れ、子育てに関するノウハウを活かして活躍する機会作りが必要である。	A	B		
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	B		
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	B		
評価の理由(法人)					
(主なデータ)					
【子育てサークル】	R3年度末	R6年度末	【外部受入れ人数】	R3年度	R6年度
サークル数	6サークル	5サークル	学生受け入れ(実習含)	24	53
サークル研修参加サークル数計	5サークル	4サークル	社会人ボランティア	9	19
サークル研修のべ参加組数計	20組	15組	【ふれあい体験参加】	R3年度	R6年度
第1回	6組	8組	中学生	0	212
第2回	9組	雨天中止	高校生	0	80
第3回	5組(Zoom)	7組	親子	0	51
1 担い手への活動支援					
・日頃から、子育て支援の場を巡回し、支援の状況把握だけでなく、子育てパートナーとともに活動の悩みなども聞き取っている。LINE等でもつながり、オンラインでも連携できている。毎年研修会と交流会をセットにして実施し、担い手同士の繋がりづくりもした。					
・サークル研修を年3回実施し、活動している親子の悩みや疑問について丁寧に聞き取りを行ったが親のライフスタイルの変化でサークル数は減少。内部の研修というより新たな参加者へ門戸を開く活動へシフトしつつある。					
2 養育者への周知と新たな担い手の発掘					
・養育者自身がサポートする気持ちをもって参加できるプロジェクトを開始した。「あつまれ！さぽーたーさん&さぽーたん」					
・あらたにサークルを立ち上げたいという希望者向けに説明を実施し、実際に新しいサークルが生まれた。					
・父親支援の講座からLINEグループが立ち上がり、当事者で運営し、地域の情報交換などでつながりを深めている。					
・スマイル・つながるプロジェクトで、地域の場へ訪問したことで、養育者が地域を感じ、関心をもてるように働きかけた。また、家族を対象に土曜日に地図を使った防災ワークを実施することで、地域への意識・関心を高めた。					
・公式サイトにボランティア募集についてのページをつくり、地域活動へ関心のある人が問合せしやすいうように工夫し、社会人ボランティアが増えた。					
3 市民への子育て家庭を見守る雰囲気づくり					
・スマイル・ポートのロゴとキャラクターをタウンニュースや広報よこはま、公式サイトにて公募し、結果もタウンニュースに掲載し、子育て支援への関心を高める工夫した。					
・みなとみらい地区の地域のおまつりの前に、MM地区の3,000戸にチラシを配布、拠点と子育てサポートシステムの周知に努めた。					
・区民祭りにも出店し、地域の団体の紹介パネルを展示した。区内の子育て支援団体と一緒にスタンプラリーをすることにより、団体同士の連携を深めた。					
4 未来の養育者への子育てへの関心や学びの機会の提供					
・プレパパママクラスで先輩ファミリーとの交流を図れる場を提供。					
・看護学部の学生の実習の受け入れを毎年実施。地域子育て支援拠点の意義を学んでもらい、親子とのふれあいも実施している。					
・神奈川大学経営学部の学生と出張ひろばを企画、実施。事前に拠点での実習を通して子育ての実際にふれてもらった。					
・NPO法人アクションポートよこはまの大学生、関東学院大学読み聞かせサークルなど、様々な大学の学生を受け入れた。					
・中学高校でのふれあい体験実施により、子育て親子との交流の機会を作り、子育てを感じてもらつた。					
・令和7年には市の「アドベンチャーカレッジ」に参加、小学生に乳幼児とふれあい体験と子育てについて考える機会を作った。					
・区内中学校のボランティアを広場でも受け入れ、拠点の活動を知ってもらった。					

評価の理由(区)

- ①地域の子育て支援活動の担い手からの相談に対応し、拠点にも共有している。また、地域の担い手向けに研修会を実施し、担い手のスキルアップを図った。研修の講師の選定方法について、適宜助言を行っている。さらに、大学生等、地域の子育て支援活動に興味を持った方に対して適したアドバイスを実施している。
- ②西区子育てサークル研修会を拠点とともに検討・実施するなど、子育てサークルへの支援を行っている。引き続き、地域の子育て支援に関心をもつ養育者を活動の場につなげる。
- ③地域における様々な子育て支援の取組を紹介するため、広報よこはま西区版に紹介記事を掲載するとともに、おでかけマップ（西区子育て航海図）を作成し、配布を行っている。今後も子育ての現状等を広く周知し、より子育て支援に関心を持ってもらう。
- ④母子健康手帳交付時に、拠点について積極的に周知を行った。また、拠点でも区役所実施と同内容のプレパパママクラスを委託にて実施し、これから子育て世代に対して妊娠中から地域での子育てについて学び触れてもらう機会をつくっている。

拠点事業としての成果と課題

（成果）

- ・子育てサークルや担い手向けに研修や交流会を行った他、個別にきめこまかく対応するなど、地域の子育て支援活動者をサポートする体制ができた。
- ・小学生から大学生まで幅広い層にアプローチし、親子とふれあう機会をつくることで、子育てへの関心や命の尊さを大切にする気持ちを感じてもらった。

（課題）

- ・子育て支援に関心を持つ区民が活動に参加しやすくなるような周知の仕組みを考えていく。
- ・忙しい現代の養育者が気軽に子育て支援に参画できる仕組みをさらに工夫する。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭（妊娠期の方を含む）を温かく見る気持ちを持つことができるよう働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	○子育てサポートシステムの認知度をどうあげていくか。 ⇒特に拠点等に行かない人たちに対してどう周知していくか。	A	B
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。	○特定の提供会員に活動の偏りがある。より多くの提供会員の登録を促すため、事業の周知を行う。	B	B
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	B

評価の理由(法人)

会員数

	R3年度末	R6年度末
利用会員	325	435
提供・両方会員	54	63

ひろば預かり

R3年度	19
R6年度	69

援助活動数

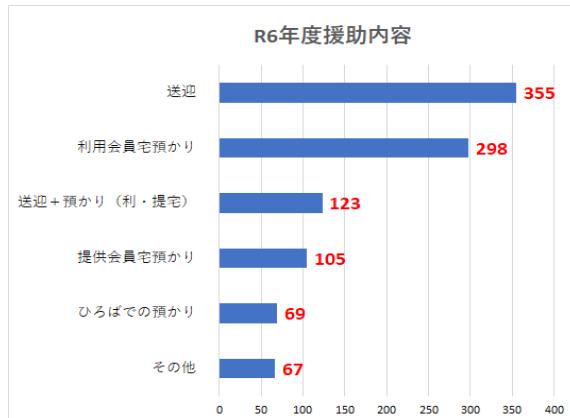
R3年度	666
R6年度	1017

一人の提供・両方会員が支える利用会員数(R6年度末)

西区(18区で一番多い)	6.92人
青葉区(18区で一番少ない)	2.84人
18区平均	4.34人

入会説明会

	回数 R3年度→R6年度	組数 R3年度→R6年度
集団	21→24	59→177
個別	107→27	107→27
出張	1→9	4→21



①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。

⇒継続的な周知活動と会員数の増加

- スマイル・ポートでの入会説明会だけでなく、つどいの広場や子育てサロンでの出張入会説明会を実施し、拠点へアクセスしやすい人にも対応した。令和3年度から令和6年度で利用会員・提供会員ともに増加している。
- 西区民まつり、みなどみらい秋まつり、区役所掲示板、地域の掲示板、広報、タウンニュース等で積極的に子サポを周知。
- ひろばでのプレパパママ向けイベント、ひろばデビューイベントにて子サポの紹介を実施。入会説明会参加へとつなげた。

②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。

⇒西区特有の会員属性への柔軟な対応とひろば預かりの促進

- フルタイム勤務の養育者が多い西区では送迎および送迎+預かりが多く、遅い時間の活動の希望も多い。対応できる提供会員の調整を図りながら、利用会員の希望する活動内容に対応した。
- しかし、常勤で働く忙しい利用会員の要望に対して、地域のつながりの大切さを理解してもらう難しさを感じ、その方法を模索している。
- 令和4年5月から、初めての預かりへのハードルを下げ気軽にひろばで子どもを預けられる「スマイル・ホッと預かり(ひろば預かり)」をスタート。ひろば預かりが大幅増となった。(令和3年度19件→令和6年度69件)
- 少しの時間預けることで保護者のリフレッシュを促進。さらに、子どもを預けるために必要なことについてコーディネーターと打ち合わせを重ねることで、自身の子育てを振り返るきっかけを提供した。
- 利用料の減額(800円→500円)や無料おためし券の配布、新システムの導入など、会員がより利用しやすい仕組みが整い、活動の増加につながっている。

③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。

⇒交流会・座談会・研修会の実施による会員間の情報共有の促進

- 提供会員向けの交流会・座談会を実施。会員同士の交流を深める一方、提供会員としての苦労やヒヤリハット等の情報共有を行い、よりよい活動につなげた。
- 緊急救命講習を実施。いざという時に備え、安全な活動となるようサポートした。
- 経験の浅い提供会員にホッと預かり(ひろば預かり)を担当してもらうことで、経験を積むとともに活動への自信を促した。

④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。

⇒丁寧な聞き取りによるコーディネートと案件フォロー

- ・利用会員の希望にできるだけ寄り添いつつ、提供会員にとってもより良い活動がしやすいよう調整した。
- ・提供会員の活動報告書提出時やコーディネートの電話連絡の際に、担当案件について聞き取りを行い情報を共有した上で、提供会員が困難を感じているケースには継続的にフォローを行った。
- ・新システムで活動報告書が即時で上がってくるようになったので、活動の内容を確認し、必要によっては提供会員の負担を調整するなどきめ細かい対応を行った。

評価の理由(区)

①～③乳幼児健康診査や母子健康手帳交付時、プレパパママクラス等にて、子育てサポートシステムの周知を行っている。また、区連会（西区連合町内会・自治会連絡協議会）を通じて、自治会・町内会の掲示板に提供会員募集のチラシを掲示するとともに、民生委員児童委員連絡協議会でも制度概要や提供会員の募集について周知を行った。さらに、広報よこはま西区版で提供会員募集の特集記事を掲載した。

定例会では、入会説明会の実施状況や会員数の増減のみならず、コーディネートに至らなかった理由や会員が入会するきっかけ等についても把握し適宜今後の対応について拠点とともに検討している。

④入会説明会の実施状況について確認し、適宜拠点とともに検討している。定例会にて、フォローが必要なケースについて共有できている。

拠点事業としての成果と課題**(成果)**

・養育者がより気軽に利用ができるよう、令和4年5月から「スマイル・ホッと預かり（ひろば預かり）」を開始した。従前から実施している通常のひろば預かりと異なり、あらかじめ日時を決めて予約枠を設けることで、子どもを預けることを躊躇しがちな養育者に声を掛けやすくなった。令和5年4月からのおためし券導入も相まって、利用が大幅に増え、養育者のリフレッシュを促進するとともに、初めて子どもを預けることへの不安感を軽減することができた。また、本事業は提供会員として経験の浅い会員が、安心して子どもを預かることができる環境にもつながっており、提供会員が経験を積み、成長する場にもなっている。

・提供会員向けに交流会・座談会を実施することで、提供会員同士の情報共有を促進した。また、緊急救命講習を実施するなど、安全な活動となるようサポートも行った。

・連合町内会・自治会連絡協議会や民生委員児童委員協議会の会議で提供会員募集に関して説明し、地域の掲示板へのチラシの掲示等の依頼をすることができた。また、今年は広報よこはま西区版にも提供会員募集の特集記事を掲載し、積極的な広報と周知を行っている。

(課題)

・提供・両方会員1人あたりが支える利用会員数が18区で一番多く、提供会員が不足している。さらに、利用会員にはフルタイム勤務の養育者が多いことから、保育園の延長的な利用希望が多く、対応できる提供会員が少ない。提供会員確保のため、地域に向けて周知を行うとともに、既存の会員が継続していけるよう、引き継ぎ支援を行っていく。

・提供会員は新規で入会する方がいる一方で退会する方もいるため、利用会員の大幅増に比べ増加数が少なく、さらなる増加が求められている。

振り返りの視点

ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。

イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。

ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。

エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。

オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。

カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。

キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。

ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。

ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか（新たな事業の実施や事業の見直しなど）

コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。

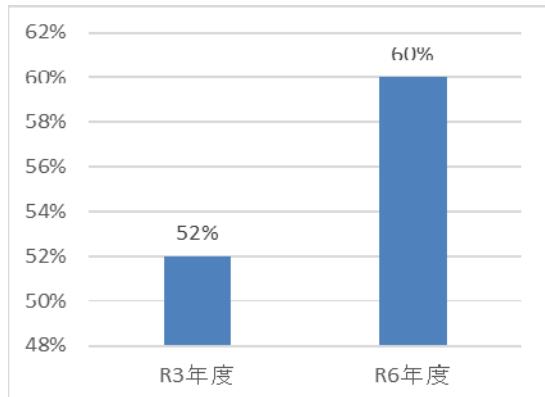
サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	○アンケート結果で子育てパートナーの認知度が33%であったため、さらなる周知が必要 ○対応件数が少ないケース(障害児対応等)については、区との連携を深め、さらにスキルアップしていく必要がある	A	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。	○区役所が特定のケースに対して、子育てパートナーを利用するように紹介していくことが課題	A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	○拠点での妊娠期の利用が少ないため、子育てパートナーをきっかけに利用を促進していく必要がある	A	A

評価の理由(法人)

●子育てパートナーの認知率 (拠点アンケートより)



●地域への訪問回数

R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
36件	58件	59件	69件

(子育てサロン、ふれあい会、親と子のつどいのひろば、合同育児講座等)

●相談内容 (毎月の報告書より)

R3年度 (総数534件)		R4年度 (総数549件)		R5年度 (総数1405件)		R6年度 (総数1476件)	
①子どもの発育・発達	20%	①子どもの発育・発達	15%	①親自身	16.8%	①親自身	18.1%
②就園・就学	18%	①親自身	15%	②子どもの生活	16%	②子どもの生活	17%
③地域情報	13%	③子どもの生活	14%	③就園・就学	13%	②就園・就学	17%

1. 妊娠期からの養育者・支援関係者・関係機関に対する利用者支援事業の周知活動を行った。

- ・拠点の公式サイトや通信、ライン配信で、子育てパートナーの紹介を行い、相談窓口や出張相談日時についても毎月周知した。
- ・拠点内の情報コーナーや授乳コーナーにおいて子育てパートナーの役割や地域への出張日などを掲示を作成し周知した。
- ・初来所者には丁寧に広場スタッフが拠点を案内し、相談窓口として子育てパートナーも紹介した。
- ・拠点内で開催する事業「スマイルデビュー-day」や「子育てサポートシステム説明会」でも顔を覚えてもらえるよう自ら役割を説明し周知の時間を設けた。
- ・関連機関の定例会に参加(子育て関連施設連絡会、支援者定例会、センター園会議、センター会議、みんなの窓口会議、自立支援協議会(児童部会)、要対協会議)、保育園や幼稚園、児童発達支援機関を訪問し周知した。
- ・親と子のつどいのひろばは「子育てパートナーとおしゃべりしよう」というイベントに合わせて出張し、子育てサロンやふれあい会にも出張し、子育てパートナーを紹介し、役割を説明し周知に努め、実際相談対応を行った。
- ・子育てパートナーの紹介動画を制作し、乳幼児健診時に流してもらうことで、子育てパートナーを周知した。
- ・赤ちゃん教室やにしこひろば(子育て支援者会場)全会場に出張し、周知に努め、その場でコミュニケーションを取った。
- ・「子育てパートナーさんの出張相談日」を設け、区役所のキッズスペース横に出張しパートナーの周知と相談を行った。(令和3年度から令和6年度まで)

- ・新しくできた中央図書館親子フロアに「子育てパートナーとおしゃべりしよう」という名前で出張相談を行った。（令和7年度から）
- ・拠点内で「子育てパートナーとおしゃべりしよう」を月1回開催し、子育てパートナーの紹介と養育者が気軽に相談できるきっかけ作りを行った。
- ・「子育てパートナーとZoomで相談（令和7年度から相談からおしゃべりに名前変更）」を月1回開始し、拠点に来られない人でも相談できるようにした。
- ・区や拠点が開催する「プレパパママクラス」でも紹介し、チラシを作成して母子手帳配布時に母子保健コーディネーターから、赤ちゃん訪問時に保健師や助産師から配布してもらい周知した。

2. 相談者に寄り添いながら、丁寧に個別相談を行い適切な支援を行った。

- ・安心して相談できるような雰囲気づくりに努めた。またゆっくり相談できるように拠点スタッフと協力して子どもを見守ってもらう体制ができている。相談内容によっては場所や時間にも配慮してじっくり相談できる仕組みを作った。
- ・発達の相談やひとり親の相談など拠点スタッフが対応できない内容だった場合には、すぐにつないでもらうように連携ができる。子育てパートナーが不在の場合にはスタッフが聞き、次回会えた時に対応できるようにしている。また1回つながった相談者は拠点スタッフにも見てもらい継続的に見守っている。
- ・相談室周りに音楽を流し、相談内容が聞こえないよう、また相談者が話しやすいよう工夫した。
- ・子育てパートナーにいつでも相談できるように、受付に「パートナーさんがいます・いません」の案内を作った。
- ・傾聴に努め、困りごと全体と一緒に引き出すように心がけた。また一度つながった養育者にはこまめに声掛けをして、顔の見える関係性を作った。
- ・相談内容によって、区と適宜連絡を取り合い、支援方法を検討した。また区の保健師が心配な養育者に子育てパートナーを紹介し、その後の利用にもつながった。
- ・相談内容によっては、拠点内の専門相談（臨床心理・助産師・栄養士・保育コンシェルジュ）に速やかにつなげ、その後も役割を確認しながら継続して支援を行った。
- ・繋がっていなかった関係支援機関にも訪問し顔の見える関係を作り、相談者をスムーズに紹介できる体制を整えた。またその相談者が再訪した場合には、その後の状況を把握し継続的な関わりを持つことができた。
- ・毎月区とケース会議を持ち、振り返りや共有を行った。
- ・いつでも相談や支援に対応しやすいうように、拠点スタッフと協力して情報コーナーを常に整備更新した。
- ・子どもの相談だけでなく親自身の相談も増えており、安心して自分のことも話せる関係性ができている。

3. 拠点のネットワークを活かし、関係機関や地域の資源と連携した。

- ・拠点のネットワークを活用し、地域の子育てサロンやふれあい会、親と子のつどいのひろば全部に出かけ、子育てパートナーの存在や役割を周知し、情報共有をすばやくできる仕組みを作った。
- ・子育て支援者会議に毎月参加し、必要な情報提供を行ったり、支援の必要な養育者の把握に努めた。
- ・区内の会議や研修に参加し、顔の見える関係になった。相談専門機関が行っている「みんなの相談窓口」会議に毎回出席し、子育て支援に限らず、多世代の多様な相談内容について、適切な機関につないだ。
- ・個別相談や養育者のニーズから以下のイベントを行った。
 - ①「ダブルケアカフェ」令和5年度はダブルケアカフェだけでなく、地域の勉強会も企画した。令和7年度はひろばのカフェだけでなく、オンラインでも参加できるようにオンラインカフェも開催した。地域での勉強会も2回実施した。
 - ②発達に不安がある親子のためのトークイベント「ゆるっとトーク」では令和6年度からは、療育の先生や近隣の児童発達支援センターの先生が出席、専門家の意見がタイムリーに聞けるようになっている。
 - ③ダウン症児のための「おしゃべりの会」は令和6年度はダウン症児とその他障がい児が参加できるように変更し、令和7年度からはサポートが必要なお子さんならどなたでも参加できるように変更した。
 - ④「外国につながる親子のためのイベント」はYODEと連携し毎年1回大きなイベントを実施した。
- ・支援が必要な養育者には、区や関係機関と情報を共有の上、対応した。
- ・母子保健コーディネーターと連携し、プレパパママのためのイベントや外国につながる家庭へのイベントの周知依頼をした。
- ・相談機関と区と協働して行う「○△□の会（障害児をもつ家庭への支援）」でもメンバーとして中心的な役割を果たした。（令和6年度まで）
- ・他区の利用者支援の事業を見学しあい、次年度以降一緒にできる取組がないか検討した。

評価の理由(区)

- ①乳幼児健康診査やプレパパママクラス開催時にスマイル・ポートが作成した動画等を放映し、広く子育て世帯に対して拠点の利用者支援事業を周知している。また、子育てパートナーに見守ってほしい養育者やこどもを必要時につなぎ、区以外にも相談できる機会をつくっている。
- ②月1回の定例会や必要に応じて、子育てパートナーの対応への助言や区でどのような支援ができるのかなどを共有している。また、関係機関の特徴や役割について情報共有し、パートナーが適切な対応をとることができるように支援している。さらに、すでに区と関わりのあるケースについて、情報の提供ができている。
- ③地域の関係機関や社会資源の情報を共有している。また、子育て支援者や母子訪問員の定例会、区の事業開催時などに子育てパートナーが参加できるよう調整した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・この5年間の中で、地域にでかけていくことにより、地域の様々な機関とつながり、様々な場所で拠点には来られない養育者にアプローチし、支援することができた。
- ・子育てパートナーが養育者と関わる中で把握したさまざまな課題やニーズを拠点のプログラムに反映できている。
- ・子育てパートナーと区職員の間で相談しやすい関係性が構築できており、相談者に寄り添った支援を連携して行うことができる。

(課題)

- ・アウトリーチすることにより、拠点内での養育者の相談に時間的に十分にこたえられないというジレンマがある。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内でおパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。
- カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
- キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
- ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。